

歯科における救急薬剤としての エピペン®注射液※の 常備について

【警告】

- (1) 本剤を患者に交付する際には、必ずインフォームドコンセントを実施し、本剤交付前に自らが適切に自己注射できるよう、本剤の保存方法、使用方法、使用時に発現する可能性のある副作用等を患者に対して指導し、患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者が理解したことを確認した上で交付すること。[本剤を誤った方法で使用すると手指等への誤注射等の重大な事故につながるおそれがある。]（「用法・用量に関連する使用上の注意」の項および「適用上の注意」の項参照）
- (2) 本剤を患者に交付する際には、患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者に対して、本剤に関する患者向けの説明文書等を熟読し、また、本剤の練習用エピペントレーナーを用い、日頃から本剤の使用方法について訓練しておくよう指導すること。[「適用上の注意」の項参照]
- (3) 本剤は、アナフィラキシー発現時の緊急補助的治療として使用するものであるため、本剤を患者に交付する際には、医療機関での治療に代わり得るものではなく、本剤使用後は必ず医療機関を受診し、適切な治療を受けるよう指導すること。
- (4) 本剤が大量投与または不慮に静脈内に投与された場合には、急激な血圧上昇により、脳出血を起こす場合があるので、静脈内に投与しないこと。また、患者に対しても投与部位についての適切な指導を行うこと。[「適用上の注意」の項参照]

【禁忌（次の患者には投与しないこと）】

次の薬剤を投与中の患者 [「併用禁忌」の項参照]
ブチロフェノン系・フェノチアジン系等の抗精神病薬、α遮断薬

【原則禁忌（次の患者には投与しないことを原則とするが、ショック等生命の危機に直面しており、緊急時に用いる場合にはこの限りではない）】

- | | |
|--------------------------|--|
| (1) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者 | (7) 精神神経症の患者 |
| (2) 交感神経作動薬に対し過敏な反応を示す患者 | (8) コカイン中毒の患者 |
| (3) 動脈硬化症の患者 | (9) 投与量が0.01mg/kgを超える患者(0.15mg製剤については15kg未満、0.3mg製剤については30kg未満の患者) |
| (4) 甲状腺機能亢進症の患者 | |
| (5) 糖尿病の患者 | |
| (6) 心室性頻拍等の重症不整脈のある患者 | |

アナフィラキシー補助治療剤

薬価基準収載

アドレナリン注射液

日本薬局方 アドレナリン注射液

エピペン® 注射液 0.15mg

エピペン® 注射液 0.3mg

EpiPEN® 劇薬、処方せん医薬品（注意・医師等の処方せんにより使用すること）

歯科治療中のアナフィラキシー・ショックの 症状を緩和する救急薬剤として、 エピペン®注射液※を院内に常備し 安心できる診療環境を整備することが望めます。



エピペン®注射液が新剤形になり、緊急時の使用性が向上しました。

エピペン®注射液0.15mg／0.3mgの注射器の機能性

新デザインのエピペン®注射液には6つの特徴があります。
新剤形により、緊急時の使用性が向上しました。

青色の安全キャップ

視認性を高め誤注射を防ぐ安全機能

人間工学的に設計された握りやすい持ち手

しっかり握れて、持ちやすい

分かりやすいイラスト付き取扱説明

イラストが大きく使い方がすぐに分かる

開けやすい ワンタッチ押し上げ式 携帯用ケース

片手で簡単に
開けられる



内蔵された オレンジ色の ニードルカバー

使用前も使用後も、
針が露出しない
(安全性が向上)

使用前

使用后



明るいオレンジ色の先端

先端(針先)がすぐに見分けられる

アナフィラキシーへの対処は先手必勝です

Dr. 林のアナフィラキシーABCD法則

- 全身じん麻疹
- 明らかな抗原曝露



A : Airway 喉頭浮腫

or

B : Breathing 喘息

or

C : Circulation ショック

or

D : Diarrhea 下痢、腹痛、嘔吐



エピネフリン筋注 必要な人に速攻で!

林 寛之:レジデントノート 6(12):1585, 2005より改変 [L20120823053]

エピペン®注射液を院内常備する(ご購入の際)には、承認条件に基づき
エピペンの「歯科医師登録講習」を受ける必要があります。

エピペンの歯科医師登録講習はPfizerPROで受講できます。

手順は、①PfizerPRO(<https://pfizerpro.jp>)への登録 ②「歯科医師登録講習」受講

3.相互作用

(1) 併用禁忌（併用しないこと）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
抗精神病薬 ブチロフェノン系薬剤 セレネース [®] トロペロン [®] 等 フェノチアジン系薬剤 ウインタミン [®] 等 イミノジベンジル系薬剤 デフェクトン [®] 等 ゾレピン [®] ロドピン [®] リスパリドン [®] リスパダール [®] α遮断薬	本剤の昇圧作用の反転により、低血圧があらわれることがある。	これらの薬剤のα遮断作用により、本剤のβ刺激作用が優位になると考えられている。
インプロテレンール等のカテコールアミン製剤、アドレナリン作動薬 プロタノール [®] 等	不整脈、場合により心停止があらわれることがある。蘇生等の緊急時以外には併用しない。	これらの薬剤のβ刺激作用により、交感神経興奮作用が増強すると考えられている。

(2) 併用注意（併用に注意すること）

薬剤名等	臨床症状・措置方法	機序・危険因子
ハロゲン含有吸入麻酔薬 ハロタン ^{注1)} インフルラン ^{注2)} セボフルラン ^{注3)} デスフルラン ^{注4)}	頻脈、心室細動発現の危険性が増大する。	これらの薬剤により、心筋のカテコールアミン感受性が亢進すると考えられている。
モノアミン酸化酵素阻害薬	本剤の作用が増強され、血圧の異常上昇をきたすことがある。	本剤の代謝酵素を阻害することにより、カテコールアミン感受性が亢進すると考えられている。
三環系抗うつ薬 イミプラミン、 アミトリプチリン等 セロトニン・ノルアドレナリン再取り込み阻害剤（SNRI） ミルナシプラン等 その他の抗うつ薬 マプロチリン等	本剤の作用が増強され、血圧の異常上昇をきたすことがある。	アドレナリン作動性神経終末でのカテコールアミンの再取り込みを遮断し、受容体でのカテコールアミン濃度を上昇させると考えられている。
メチルフェニデート		
分娩促進薬 オキシトシン等 バッカアルカロイド類 エルゴタミン等	本剤の作用が増強され、血圧の異常上昇をきたすことがある。	これらの薬剤の血管平滑筋収縮作用により、血圧上昇作用を増強すると考えられている。
ジギタリス製剤	異所性不整脈があらわれることがある。	ともに異所性刺激能を有し、不整脈発現の可能性が高くなると考えられている。
キニジン	心室細動があらわれることがある。	相互に心筋に対する作用を増強すると考えられている。
甲状腺製剤 チロキシン等	冠不全発作があらわれることがある。	甲状腺ホルモンは心筋のβ受容体を増加させるため、カテコールアミン感受性が亢進すると考えられている。
非選択性β遮断薬 プロプラノロール等	血圧上昇、徐脈があらわれることがある。	β遮断作用により、本剤のα刺激作用が優位になると考えられている。
血糖降下薬 インスリン等	血糖降下薬の作用を減弱させることがある。	本剤の血糖上昇作用によると考えられている。
プロモクリプチン	血圧上昇、頭痛、痙攣等があらわれることがある。	機序は明らかではないが、本剤の血管収縮作用、血圧上昇作用に影響を及ぼすと考えられている。
利尿剤 チアジド系利尿剤 トリクロルメチアジド ヒドロクロチアジド等 チアジド系類似剤 インダパミド等 ループ利尿剤 フロセミド等 カリウム保持性利尿剤 スピロラクトン	本剤の作用が減弱することがある。手術前の患者に使用する場合、利尿剤の一時休業等を行うこと。	併用により本剤の血管反応性を低下させることがある。

注1：ハロタン麻酔中のヒトの50%に心室性期外収縮を誘発するアドレナリン量（粘膜下投与）は2.1μg/kgと報告されている。
この量は60kgのヒトの場合、エビベン注射液0.15mg（40万倍希釈アドレナリン含有溶液）50mLに相当し、エビベン注射液0.3mg（20万倍希釈アドレナリン含有溶液）25mLに相当する。

注2：インフルラン麻酔中のヒトの50%に心室性期外収縮を誘発するアドレナリン量（粘膜下投与）は6.7μg/kgと報告されている。
この量は60kgのヒトの場合、エビベン注射液0.15mg（40万倍希釈アドレナリン含有溶液）160mLに相当し、エビベン注射液0.3mg（20万倍希釈アドレナリン含有溶液）80mLに相当する。
注3：セボフルラン麻酔中、5μg/kg未満のアドレナリンを粘膜下に投与しても3回以上持続する心室性期外収縮は誘発されなかったが、5μg/kg～14.9μg/kgのアドレナリンを投与した場合、1/3の症例に3回以上持続する心室性期外収縮が誘発された。
アドレナリン5μg/kgは、60kgのヒトの場合、エビベン注射液0.15mg（40万倍希釈アドレナリン含有溶液）120mLに相当し、エビベン注射液0.3mg（20万倍希釈アドレナリン含有溶液）60mLに相当する。
注4：デスフルラン麻酔中、7.0μg/kg未満のアドレナリンを粘膜下に投与しても3回以上持続する心室性期外収縮は誘発されなかったが、7.0μg/kg～13.0μg/kgのアドレナリンを投与した場合、50%（6/12例）の症例に3回以上持続する心室性期外収縮が誘発された。
アドレナリン7.0μg/kgは、60kgのヒトの場合、エビベン注射液0.15mg（40万倍希釈アドレナリン含有溶液）168mLに相当し、エビベン注射液0.3mg（20万倍希釈アドレナリン含有溶液）84mLに相当する。

4.副作用

(1) 重大な副作用（頻度不明^{※5)}

- 1) 肺水腫（初期症状：血圧異常上昇）：肺水腫があらわれることがあるので、観察を十分に行い、異常が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。
- 2) 呼吸困難：呼吸困難があらわれることがあるので、異常が認められた場合には投与を中止するなど適切な処置を行うこと。
- 3) 心停止（初期症状：頻脈、不整脈、心悸亢進、胸内苦悶）：心停止があらわれることがあるので、初期症状が認められた場合には投与を中止し、適切な処置を行うこと。

(2) その他の副作用

下記の副作用があらわれることがあるので、異常が認められた場合には必要に応じ投与を中止するなど適切な処置を行うこと。

	5%以上または不明 ^{※5)}	0.1～5%未満
循環器	心悸亢進	胸内苦悶、不整脈、顔面潮紅・蒼白、血圧異常上昇
精神神経系	頭痛、めまい、不安、振戦	
過敏症	過敏症状等	
消化器	悪心・嘔吐	
その他	熱感、発汗	

注5：自発報告または海外において認められている副作用のため頻度不明。

5.高齢者への投与

高齢者では、本剤の作用に対する感受性が高いことがあるので、少量から投与を開始するなど患者の状態を観察しながら慎重に投与すること。

6.妊婦、産婦、授乳婦等への投与

妊婦、妊娠している可能性のある婦人または産婦には投与しないことが望ましい。〔胎児の酸素欠乏をもたらしたり、分娩第二期を遅延するおそれがある。〕

7.小児等への投与

低出生体重児、新生児及び乳児に対する安全性は確立していない（使用経験がない）。

8.過量投与

- (1) ときに心室細動、脳出血等があらわれることがあるので注意すること。またアドレナリン受容体感受性の高い患者では、特に注意すること。
- (2) 腎血管の異常収縮により、腎機能が停止するおそれがある。
- (3) 血中の乳酸濃度が上昇し、重篤な代謝性アシドーシスがあらわれるおそれがある。

9.適用上の注意

本剤を処方する医師は以下の内容について正しく理解するとともに、患者に交付する際には、患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者に以下の内容を必ず交付前に説明すること。

- (1) 本剤を適切に注射するためには、携帯用ケースのふたを開けて注射器を取り出し、青色の安全キャップを外し、大腿部の前外側にオレンジ色のニードルカバー先端を数秒間強く押し付け。適正に本剤が作動した場合には、オレンジ色のニードルカバーが伸びる。また、本剤を大腿部の前外側以外の尻や身体他の部分に注射しないこと。
- (2) 本剤は光で分解しやすいため、携帯用ケースに収められた状態で保存し、使用前に携帯用ケースから取り出すこと。
- (3) 本剤は15℃～30℃で保存することが望ましいので、冷所または日光のあたる高温下等に放置しないこと。
- (4) 本剤には有効期限が記載されている。有効期間に注意して、有効期限が来る前に新しい製品の処方を受けること。
- (5) 本剤が変色していたり、沈殿物が認められたりしないか定期的に確認すること。認められた場合、本剤を使用せず新しい製品の処方を受けること。
- (6) 本剤を使用した場合あるいは使用する必要がなくなった場合には、医療機関等へ本剤を提出すること。
- (7) 携帯用ケース及び本剤を落とさないように注意すること。落としてしまった場合、破損や漏れがないか確認すること。

承認条件

- (1) 本剤の安全性及び有効性を十分に理解し、本剤の使用に関して適切かつ十分な指導ができる医師のみによって本剤が処方・使用されるよう、本剤を納入する前に予め講習を実施する等の適切な措置を講じること。
- (2) 本剤の適正使用を推進するため、本剤の未使用製剤を回収できるよう必要な措置を講じること。

包装

エビベン注射液 0.15mg：1本
エビベン注射液 0.3mg：1本

詳細は添付文書等をご参照ください。警告・禁忌を含む使用上の注意の改訂に十分ご留意ください。

2012年10月改訂（第9版、承継に伴う改訂）



歯科において
使用頻度が高い局所麻酔薬やラテックス製手袋は、
アナフィラキシーを起こす可能性が高いので注意が必要です。

アナフィラキシー反応を起こす可能性のある歯科用薬剤・歯科材料

歯科用局所麻酔薬	(防腐剤、抗酸化剤を含む)
ラテックス	ラバーダム、手袋、印象材、根管充填材
ヨード類	ポピドンヨード (イソジン)
消毒薬	グルコン酸クロルヘキシジン (ヒビテン)
ガッタパーチャ	
ホルマリンクレゾール	
抗菌剤、鎮痛剤	
その他	研磨用バー、バキューム先端のチップ、局所麻酔薬カートリッジ内のストッパー、矯正治療時のエラスティック・バンド、デンタルコーン、歯周組織炎治療用ペースト

見崎 徹 ほか: 歯界展望 106 (3): 591, 2005より改変 [L20120612039]

歯科で使用する薬剤には
鶏卵や牛乳の成分を含むものがあるため、
牛乳や卵アレルギーのある患者さんにも注意が必要です。

牛乳や卵アレルギーのある患者に投与してはいけない薬剤

アレルギーのある食物	含有成分	薬効分類	薬剤 (商品名)
鶏卵 (卵白)	リゾチーム 塩酸塩	消炎酵素	アクディーム®、レフトーゼ® など
		歯痛・ 歯槽膿漏薬	デンタルカプセル、パウンドカプセル、 アセス®錠 など
		口腔咽頭薬 (トローチ剤)	カイゲントローチ、エスエスブロン®トローチ、 新コルゲンコーワトローチ、 セピー®トローチ など
牛乳	カゼイン	マクロライド系 抗生物質製剤	メデマイシンカプセル®
	CPP-ACP (リカルデント)	口腔ケア用 塗布薬	ジーシーMIペースト® など

ラテックスアレルギーはバナナ、キウイ、アボカド、クリなどの特定のフルーツに含まれるたんぱく質と交差抗原性があるため、これらの食物にアレルギーのある人がラテックスに接触すると、アナフィラキシーを起こすことがあります。



アナフィラキシー反応により、 皮膚症状や呼吸器症状などの全身症状が現れます。

アナフィラキシーの徴候と症状出現頻度 [海外データ]

皮膚症状 じん麻疹、血管性浮腫 皮膚紅潮 発疹のないかゆみ	90% 85 ~ 90% 45 ~ 55% 2 ~ 5%
呼吸器症状 呼吸困難、喘鳴 喉頭浮腫 鼻炎	40 ~ 60% 45 ~ 50% 50 ~ 60% 12 ~ 20%
めまい、失神、血圧低下	30 ~ 35%
腹部症状 嘔気、下痢、腹痛	25 ~ 30%
その他 頭痛 胸痛 発作	5 ~ 8% 4 ~ 6% 1 ~ 2%

方法：

過去に報告されたデータ
(14文献、1,865症例) に
基づいて著者が作成
(各症状の割合は推定値)

Joint Task Force on Practice Parameters: J Allergy Clin Immunol 115 (3 Suppl 2): s483, 2005 [L20090914016]

**アナフィラキシーが進行すると生命の危険性が非常に高くなるため、
歯科診療所における迅速かつ的確な対応が求められます。**

症状からアナフィラキシーであると判断

- 起因物質の使用中止
- 緊急コール (119番通報および近隣医師に応援要請)
- 患者を仰臥位に寝かせ、下肢挙上

- バイタルサイン (意識状態、血圧、脈拍数、呼吸数など) のチェック
- モニター (パルスオキシメーターなど)
- 酸素投与 (10L/分)
- 可能ならば、末梢静脈路の確保 (生理食塩水かリンゲル液を急速輸液)

喘息、呼吸促拍、ショックのいずれかがあれば

アドレナリン0.3mg大腿筋注 (エピペンなど)

心肺停止

BLS (胸骨圧迫、人工呼吸)



▲エピペンの注射方法

アナフィラキシー補助治療剤

【薬】 処方せん医薬品(注意—医師等の処方せんにより使用すること)

アドレナリン注射液

エピペン®

注射液 0.15mg

EpiPEN®

日本薬局方 アドレナリン注射液

エピペン®

注射液 0.3mg

EpiPEN®

- 【警告】
- (1) 本剤を患者に交付する際には、必ずインフォームドコンセントを実施し、本剤交付前に自らが適切に自己注射できるよう、本剤の保存方法、使用方法、使用時に発現する可能性のある副作用等を患者に対して指導し、患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者が理解したことを確認した上で交付すること。〔本剤を誤った方法で使用すると手指等への誤注射等の重大な事故につながるおそれがある。〕〔用法・用量に関連する使用上の注意〕の項および〔適用上の注意〕の項参照〕
 - (2) 本剤を患者に交付する際には、患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者に対して、本剤に関する患者向けの説明文書等を熟読し、また、本剤の練習用エピペントレーナーを用い、日頃から本剤の使用方法について訓練しておくよう指導すること。〔適用上の注意〕の項参照〕
 - (3) 本剤は、アナフィラキシー発現時の緊急補助的治療として使用するものであるため、本剤を患者に交付する際には、医療機関での治療に代わり得るものではなく、本剤使用後は必ず医療機関を受診し、適切な治療を受けるよう指導すること。
 - (4) 本剤が大量投与または不慮に静脈内に投与された場合には、急激な血圧上昇により、脳出血を起こす場合があるので、静脈内に投与しないこと。また、患者に対しても投与部位についての適切な指導を行うこと。〔適用上の注意〕の項参照〕

- 【禁忌 (次の患者には投与しないこと)】
- 次の薬剤を投与中の患者〔併用禁忌〕の項参照〕
- ブチロフェノン系・フェノチアジン系等の抗精神病薬、α遮断薬

- 【原則禁忌 (次の患者には投与しないことを原則とするが、ショック等生命の危機に直面しており、緊急時に用いる場合にはこの限りではない)】
- (1) 本剤の成分に対し過敏症の既往歴のある患者
 - (2) 交感神経作動薬に対し過敏な反応を示す患者〔アドレナリン受容体が本剤に対し高い感受性を示すおそれがある。〕
 - (3) 動脈硬化症の患者〔本剤の血管収縮作用により、閉塞性血管障害が促進され、冠動脈や脳血管等の攣縮および基質の閉塞があらわれるおそれがある。〕
 - (4) 甲状腺機能亢進症の患者〔甲状腺機能亢進症の患者では、頻脈、心房細動がみられることがあり、本剤の投与により悪化するおそれがある。〕
 - (5) 糖尿病の患者〔肝におけるグリコーゲン分解の促進や、インスリン分泌の抑制により、高血糖を招くおそれがある。〕
 - (6) 心室性頻拍等の重症不整脈のある患者〔本剤のβ刺激作用により、不整脈を悪化させるおそれがある。〕
 - (7) 精神神経症の患者〔一般に交感神経作動薬の中枢神経系の副作用として情緒不安、不眠、錯乱、易刺激性および精神病的状态等があるので悪化するおそれがある。〕
 - (8) コカイン中毒の患者〔コカインは、交感神経末端でのカテコールアミンの再取り込みを阻害するので、本剤の作用が増強されるおそれがある。〕
 - (9) 投与量が0.01mg/kgを超える患者 (0.15mg 製剤については15kg未満、0.3mg 製剤については30kg未満の患者)〔過量投与になるので、通常のアドレナリン注射液を用いて治療すること。〕〔用法・用量に関連する使用上の注意〕(2)の項参照〕

組成・性状		
エピペン注射液 0.15mg およびエピペン注射液 0.3mg は、1 管 2mL 入り製剤であるが、0.3mL 注射される。		
販売名	エピペン注射液 0.15mg	エピペン注射液 0.3mg
成分・含量 (1 管中)	アドレナリン 1mg/2mL	アドレナリン 2mg/2mL
添加物	ピロ亜硫酸ナトリウム 3.34mg/2mL	
pH	2.2 ～ 5.0	
性状	無色澄明の液	

日本標準商品分類番号		872451
	エピペン注射液 0.15mg	エピペン注射液 0.3mg
承認番号	21700AMY00081	21500AMY00115
薬価収載	2011年9月	
販売開始	2005 年 4 月	2003 年 8 月
貯 法	室温・遮光保存	使用期限 容器および外装に記載

- 【効能・効果】
- 蜂毒、食物及び薬物等に起因するアナフィラキシー反応に対する補助治療 (アナフィラキシーの既往のある人またはアナフィラキシーを発現する危険性の高い人に限る)
- 【効能・効果に関連する使用上の注意】
- (1) アナフィラキシー反応は、病状が進行性であり、初期症状 (しびれ感、違和感、口唇の浮腫、気分不快、吐き気、嘔吐、腹痛、じん麻疹、咳込みなど) が患者により異なることがあるので、本剤を患者に交付する際には、過去のアナフィラキシー発現の有無、初期症状等を必ず聴取し、本剤の注射時期について患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者に適切に指導すること。
 - (2) また、本剤の注射時期については、次のような目安も参考とし、注射時期を遺失しないよう注意すること。
 - 1) 初期症状が発現し、ショック症状が発現する前の時点。
 - 2) 過去にアナフィラキシーを起こしたアレルゲンを誤って摂取し、明らかな異常症状を感じた時点。

- 【用法・用量】
- 通常、アドレナリンとして 0.01mg/kg が推奨用量であり、患者の体重を考慮して、アドレナリン 0.15mg 又は 0.3mg を筋肉内注射する。
- 【用法・用量に関連する使用上の注意】
- (1) 通常、成人には 0.3mg 製剤を使用し、小児には体重に応じて 0.15mg 製剤又は 0.3mg 製剤を使用すること。
 - (2) 0.01mg/kg を超える用量、すなわち、体重 15kg 未満の患者に本剤 0.15mg 製剤、体重 30kg 未満の患者に本剤 0.3mg 製剤を投与すると、過量となるおそれがあるので、副作用の発現等に十分な注意が必要であり、本剤以外のアドレナリン製剤の使用についても考慮する必要があるが、0.01mg/kg を超える用量を投与することの必要性については、救命を最優先し、患者ごとの症状を観察した上で慎重に判断すること。
 - (3) 本剤は投与量を安定化するため、1 管中 2mL の薬液が封入されているが、投与されるのは約 0.3mL であり、注射後にも約 1.7mL の薬液が注射器内に残るように設計されていることから、残液の量をみて投与しなかったと誤解するおそれがあるので注意すること。
 - (4) 本剤には安全キャップが装着されており、安全キャップを外すと、予期せぬときに作動するおそれがあるので、本剤の注射を必要とする時まで、絶対に安全キャップを外さないこと。〔適用上の注意〕の項参照〕
 - (5) 本剤は一度注射すると、再度注射しても薬液が放出しない仕組みとなっているので、同一の製剤を用いて二度注射しないこと。
 - (6) 本剤は臀部からの注射を避け、大腿部の前外側から注射すること。また、緊急時には衣服の上からでも注射可能である。〔適用上の注意〕の項参照〕
 - (7) 本剤の誤注射を防止するため、指または手等をオレンジ色のコードカバー先端にあてないよう注意すること。なお、もし指または手等に誤って本剤を注射した場合には、直ちに医療機関を受診して、適切な処置を受けるよう指導すること。〔適用上の注意〕の項参照〕
 - (8) 本剤を患者に交付する際には、上記事項について患者、保護者またはそれに代わり得る適切な者に対して十分指導すること。

- 【使用上の注意】
1. 慎重投与 (次の患者には慎重に投与すること)
- (1) ハロタン等のハロゲン含有吸入麻酔薬を投与中の患者〔併用により心筋のカテコールアミン感受性が亢進すると考えられており、頻脈、心室細動等の発現の危険性が増大するおそれがある。〕〔相互作用〕の項参照〕
 - (2) 高血圧の患者〔本剤の血管収縮作用により、急激な血圧上昇があらわれるおそれがある。〕
 - (3) 肺気腫のある患者〔肺循環障害を増悪させ、右心系への負荷が過重となり、右心不全に陥るおそれがある。〕
 - (4) 高齢者〔「高齢者への投与」の項参照〕
 - (5) 心疾患のある患者〔本剤のβ刺激作用により、心疾患を悪化させるおそれがある。〕
2. 重要な基本的注意
- (1) 本剤はアドレナリン受容体作動薬として、α受容体、β受容体それぞれに作用し、その作用は投与量、投与方法等に影響を受けやすいので注意すること。
 - (2) 本剤はアナフィラキシーショックの救急治療の第一次選択剤であり、ショック時の循環動態を改善するが、その循環動態はショックを起こした原因および病期により異なることがあるので、治療に際し本剤の選択、使用時期には十分注意すること。
 - (3) 本剤は心筋酸素需要を増加させるため、心原性ショックや出血性・外傷性ショック時の使用は避けること。
 - (4) 本剤には昇圧作用のほか血管収縮、気管支拡張作用等もあるので、ショックの初期治療後は他の昇圧薬を用いること。
 - (5) 過度の昇圧反応を起こすことがあり、急性肺水腫、不整脈、心停止等を起こすおそれがあるので、過量投与にならないよう注意すること。
 - (6) 本剤を患者に交付する際には、必ずインフォームドコンセントを実施し、本剤の注射により発現する可能性のある副作用および手指等への誤注射等のリスクについても、十分に説明し指導すること。